

新刊批評

平井泰太郎教授著

「販賣組織の更改と經營機構」

室谷賢治郎

一

神戸商業大學の平井泰太郎教授は最近表題の如き著書を公刊せられて一本を筆者にまで惠贈せられた。繙讀するに視野の廣さと觀察の鋭さとに敬服せしめられ、名匠の腕のいよく、冴え行くさまを詠歎する外はない。茲に紹介批評の一文を草すべき快い義務が課せられる。

平井教授の新著は從來の同教授の諸業績と異り論文集である。收むるところ十六篇、總説及び終編にそれぞれ一篇宛の論陣を張り堅め、其の間に残りの十餘篇

一九六

を三つの編に振宛てられる。即ち總説に於て「販賣革命の立體性」を論じ、終編に於て「營利主義の再吟味」を與へられる間に「恆星經營と遊星經營」(第一編)、「産業組合の擴充と商人主義」(第二編)及び「廣範圍取引と大量販賣」(第三編)が排列せられるといふ構造が本書に於て見られるのである。各論文は概ね公開の席上に於て講演せられたところの要領で、古いものは昭和八年から新しいものは昭和十二年に及んでゐる。教授の自序によれば(昭和十二年八月十日附)本書は再度の外遊を前にして取纏めたものに屬するから嚴密に言ふときは三箇年と月餘の努力の跡が四百頁に亘る金玉の文字となつて現はれたのである。

二

平井教授の懷抱せられる根本思想は頗る深きものあり輕々しく論斷することを許されぬ。唯だ教授自身の言を藉りて言へば本書は「販賣組織の更改によつて經營機構の形態及び存在が變化を受けて居ると考へられる側面に關しての觀察を記したものが中心になつて居る。

企業形態も一概に營利主義のみによつて動かす、新しき公權主義及び組合主義と相並んで、従前通りの生業形態及び家業形態によつてもまた補はれて居るのである。その間の緊密な連鎖と縫合ひとの間に、産業組織の實在を洞察すべきでないかといふことが構想である。」(序の二―三頁)又曰く「商人主義も様々の角度から排撃せられては居るが、これが機會となつてそれ自體の高度化が行はれ、その中に棄つべからざるものゝないではないことが次第に明瞭となつて來て居るやうである。營利主義はその内容が更改せられ、これによつて確固たる計算性の上に新しき意味の企業形態が成立つて行くのではないかといふ傾向が見える。この點に關する思索の過程もこの一卷に現れて來て居る。」(序の三頁)

故に本書の總説としての「販賣革命の立體性」は卑見を以てすれば全卷中の基調を爲す所論である。所謂販賣革命とは第十九世紀初頭までに成就せられた産業革命が生産革命並びに交通革命であつたのに對して第二十世紀の現在に行はれるところのものを指すに他ならぬ。販賣革命或は配給革命は第二の産業革命である

と謂つて宜い。此の販賣革命なる語は決して空疎な修辭ではなく、外國でも著名な學者が眞摯な態度で用ひて居るのである(例へば L. Urwick, *Management of Tomorrow*, London 1933. を看よ)。平井教授の見解の下にあつては販賣革命と稱せらるゝものは實は三つの坐標を以て進行して居る。「その一に、商品配給過程再組織の側面のあることは事實であるが、併せて、その二に、生産方法並びに生産組織の變革に伴ふ偕調を求めんとする側面があり、なほ、その三に、販賣方法並びに販賣組織の變革に伴ふ配分の公正を求めんとする側面があるのである。」(七頁)この事實を指して教授は「立體性」と名付けられるのである。即ち教授の見解につき逆言することが許されるならば巷間考へられる如く販賣の方法や組織を變革しようとするのは販賣革命の「平面性」でこそあれ、未だ「立體性」とは稱し得ぬ。販賣革命の立體性は一波起つて萬波を動かすが如く芋蔓式に凡ゆる經營形態に更改を促す傾向を捕へることゝなるのである。

隨つて教授の總説を味得することの出來る讀者は第一編に入り「恆星經營と遊星經營」に接して愈々興味

の深きを覚えしめられる。併しながら之に反して總説を理解し得なかつた讀者にとつては恆星經營遊星經營の造語に對してさへ或は奇怪の念を禁じ得ぬかも測られぬ。何れにせよ教授の見る所では現代の經營形態は資本家的大規模のもののみならず、生業及び家業をも顧みる必要が大いにある。「生業」とは「一の業務が營まるゝに就て、主として特定の個人の有する勞力または能力即ち技能を利用することによつて、これを行ふものを指し示さんとし」(三四頁)、「家業」とは「一定の家産を有し、家族及び従業員が、主人の個人的なる指揮監督の下に業務を營んで居るものを指さうといふのである」(三六頁)。生業及び家業は其の經營の指導精神として營利といふことを重んぜず、生活の維持や共存同榮を念とするものであるが、之等が相結び相補つて大經營に發展する楷梯を爲すことが屢ある。仍て大經營と中小經營との關係は恰も恆星と遊星とのそれに譬へらるべく、現代の營利主義經濟機構の内にも生活原理に導かれた衣食主義的要素の都合よき抱擁の行はれて居ることを看過してはならぬといふのである。別言すれば個人主義的にして自由競争に基礎を置く有償

的交換經濟の機構が巧みな調和を保つ所以は茲に存すと見るのである。

事茲に至れば教授が進んで「經營者職能の外縁的分擔」を論ぜられるのは極めて自然である。即ち一方に大規模經營の公共的社會的性質と、他方に中小經營の相互啓發、從業者互換、經驗交換等による職能轉嫁とが発生することを洞察せざるを得ぬのである。斯くして畢竟するに中小經營は廣く叫ばれる如く自力更生すべきものではなく、幾分逆説的に聞えるかも知れぬけれども他力更生するものである。但し他力更生と謂つても徒らに拱手して大經營の恩恵に縋るといふ意味では決してない。此の場合の他力更生は大經營と中小經營との併立共榮の意に解せらるべきものである。

三

右は本書の理論的部分を成す第一編の骨子を拾ひ上げたものである。惟ふに經營形態に關し最も問題多きものは大經營と中小經營との對立であり摩擦である。英國のフロレンス教授は嘗て現代の産業が中小經營から成る實狀を非合理的 illogical と名付け、之が合理的

logical な大經營に移行すべきことを説いた (P. S. Florence, The Logic of Industrial Organization. London 1933. — 尙ほ拙著「經營經濟學概論」第三章參照)。然るにいま平井教授は經營の大小併立することを夫自身決して非合理的と見ることなく寧ろ偕調を爲すものと説かれるのである。經營機構の變革は合理性對非合理性の問題ではなく廣義の産業革命が齎す立體性の問題である。果して然らば此の理論の根底には恒久的な理念が見出されぬのではなからうかといふ疑を寄せざるを得ぬ。蓋し卵が先きか雞が先きかの譬もあるやうに販賣革命が生じて經營機構を改變せしめるとも、或は又經營機構が變化して販賣革命を招來せしめるとも謂ひ得られるからである。其の變革の過程は螺旋的に擴大せられるやうに見られるが、出發點と歸着點とが明瞭にせられぬ憾がある。部分的の因果法則は發見し得ても全體としてのテレオロギーの考察が缺如してゐるのではあるまいか。此の點平井教授に教を乞ひたいと思ふ。

四

さて第二編及び第三編は適切な時論と周到な調査とに費されて居る。即ち第二編には所謂反産運動に就て種々の角度から論議を與へ、第三編には賣買を中心に市場分析、分割拂制度、賣價政策等が統計的數字と共に解明せられる。此の兩編は謂はゞ本書の實證的部分を占るものであつて、兎角の異議を挿む餘地も無い。平井教授の博覽に畏敬するのみである。唯だ終編としての「營利主義の再吟味」にあたつて、「凡そ一個の經營形態の態様を明かにせんがためには、少くともこれを三つの側面より考察しなければならぬ」(二八五頁)とせられ、經濟意識、經濟技術及び秩序の三つを挙げられたが、此の三つを常に高調するのは獨逸のゾムバルト教授であるからゾ教授の説との關聯を今少し明かにして頂きたかつたと望蜀の念を抱くのである。

さはあれ平井教授の新著は教授が過去二十年の思索の結晶とも謂ふべきもの、既著の何れにも増して光輝ある論策に滿されて居る。我が經營經濟學に於ける新寶典の名に値する。窺知するに本書は教授の「經營學論考」の第一冊を成す。希くは更に第二冊以下が刊行せられて益々學界を照明せんことを。——一九三八年五月——